博士論文要旨

Foreignism and Colloquialism in the Development of the Sinhalese Literary Language

（シンハラ文章語の発展史における外来言語と口語用法の影響）

マッラワ　アーラッチゲー　ニマル　カルナーラトナ
一橋大学大学院言語社会研究科
LD0218
2005年10月31日

論文指導委員：糟谷　啓介教授（正）、イ・ヨンスク教授（副）

シンハラ文章語の発展史における外来言語と口語用法の影響

本論文は政治的及び社会的な要因を考慮しつつ文体論的な視点からシンハラ語の散文体の発展過程を論じたものである。本論文では様々なテキストの分析を多数おこない、シンハラ語散文体の発展の実証研究を目指した。また、外来言語の影響と口語用法というおそらくどの言語の文章語の発展にもある要素を考慮したことにより、本論文を文章語発展の一般理論に寄与するであろう事例研究として位置づけている。

本論文において第1章では問題意識及び方法論を明らかにすると同時に本論文の概略を示した。その後は、基本的に時系列に従い、各時代のシンハラ語散文体の特徴をもとに章立てを行った。第2章ではシンハラ語の成立から中世シンハラ語、第3章では12世紀のシンハラ語、第4章では13世紀から16世紀までのシンハラ語について述べた。第5章及び第6章では16世紀からの西洋植民地主義のシンハラ語散文体に対する影響およびスリランカ独立後のシンハラ語散文体の発展を論述したが、第5章では政治社会的状況とシンハラ語の関係、第6章では主に小説における散文体そのものの発展過程を論じた。本要旨では次項において主に第１章から方法論と研究対象にかかる部分を抽出したものを書いたが、その後は原則的には論文の各章の要約を書いている。章の番号は見出しの後に付けた。

方法論と研究対象

シンハラ語には長い歴史をもつ散文体と韻文体がある。外来言語の影響（Foreignism）は主に散文体にみられる。ここでいう外来言語とは、東洋言語であるプラークリット語、パーリ語、サンスクリット語、タミル語、及び西洋言語であるポルトガル語、オランダ語、英語のことである。韻文体は紀元後15世紀までは純粋なシンハラ語が使われ続けられたとされている。本論文では主に散文体のみを扱った。

シンハラ語においては、文章語の成立において、口語の影響が色濃く見られる。本論文では、口語用法（Colloquialism）に基づく書きことばが推進される傾向を「進歩的傾向」（Progressive Tendency）と呼んでいる。

また、本論文の基底となる考え方を示しておく。本論文で言う「文章語」（Literary Language）は、散文文学を書き表すことばである。この文章語は往々に話しことばと深い関係を持っているが、その発展は作家の才能と努力による。また、作家が文学作品を作ることは、翻訳や借用、さらに新語の創作などにより、言語の語彙に大きく貢献する。その反面、文学作品が朗読により受容される社会では、複雑な表現が単純化され、文章語は話しことばに影響を及ぼす。

本論文においては、論文そのものは英語で書かれており、要旨は日本語で書かれていることから、翻訳した概念について若干の説明を要する。論文そのものではLanguageとStyleという二つの概念を使った。Languageは歴史言語学で言うところの言語と広い意味で文章

において使われることばという両方の意味を含んでいる。例えば、前者の用法はSanskrit languageやSinhalese languageに見られ、後者の用法はSinhalese prose languageに見られる。本要旨の日本語では前者のLanguageを「言語」、後者のLanguageを「文体」と訳している。StyleもしくはStyle of Writingはそもそもサンスクリット語の文法学に見られる修辞およびその実践のことであり、これらは「修辞用法」と訳した。また、下の時代区分で触れる二つの概念についても説明しておく。Modernは文脈に応じて「近現代」または「近代」と訳している。「近代」は、Late Modernに対比させる必要があるときに使い、Late Modernは「現代」と訳した。

対象とする史料としては、紀元前3世紀から12世紀までは碑文を使用し、12世紀から現在までは主に紙史料を使用した。（なお、本要旨においては、紀元前は「紀元前」と明記しているが、紀元後は原則的に無明記とした。）シンハラ語で書かれた9世紀までの史料は碑文しか現存していない。また、碑文は一度彫られてしまうと、そのことばは何十世紀という長い期間にわたり変わらず、現代の研究者がその当時に使われていたことばそのものを観察できるという利点がある。12世紀以降の紙史料の利用に関しては、12世紀までは多くの碑文が使われてきたが、12世紀以降は本における散文の変遷が顕著となることがその理由である。

実際の分析方法としては、主には碑文、紙史料に書かれたものを引用し、それらを文法的・語彙的に分析した。なお、本要旨においては紙面の関係から各章の文法・語彙分析の細かい説明は割愛した。

本論文では2種類の時代区分を使っている。シンハラ語の発展史はその言語的特性から見て次の四時期に分けられる。紀元前3世紀から4世紀までのシンハラ・プラークリット語期（Sinhalese Prakrit）、4世紀から8世紀までのプロト・シンハラ語期（Proto Sinhalese）、8世紀から13世紀までの中世シンハラ語期（Medieval Sinhalese）、13世紀から20世紀までの近現代シンハラ語期（Modern Sinhalese）である。この近現代シンハラ語においては、1940年代を分水嶺とし、それ以前を近代（Modern）、それ以降を現代（Late Modern）としている。政治社会的な変遷については、ヨーロッパ人による植民地化以前は紀元前236年から紀元後1017年までのアヌラーダプラ時代（Anuradhapura）、1017年から1070年までのチョーラ朝時代(Chola)、1070年から1235年までのポロンナルワ時代（Polonnaruwa）、1236年から1302年までのダンバデニ時代（Dambadeniya）、1302年から1340年までのクルネーガラ時代(Kurunegala)、1341年から1415年までのガンポラ時代(Gampola)、1415年から1505年までのコーッテ時代(Kotte)に分けられる。植民地化以降は、1505年から1658年までのポルトガル植民地時代、1658年から1796年までのオランダ植民地時代、そして1796年から1948年までのイギリス植民地時代がある。スリランカは1948年2月4日に近代国家として独立を果たす。本論文では言語の形態を政治社会的側面から歴史的に検証することが目的であることから、これらの2種類の時代区分を併用した。

シンハラ文学の起源はシンハラ語の発生にまでさかのぼる。シンハラ語については、後

世の伝説等で紀元前6世紀に生まれたと推測されるが、紀元前3世紀以前には史料が存在していない。シンハラ語はインド・アーリア語族に属する。

シンハラ語の成立から中世シンハラ語まで（第2章）

一般的には、シンハラ語およびシンハラ文学は、紀元前3世紀から連続していると考えられている。本論文では、シンハラ語が歴史的、政治的、宗教的、文化的、社会的影響によって徐々に発展してきたことを論証した。アショーカ時代のマヒンダ（Mahinda）がスリランカに仏教を伝来したと言われている。その仏教とともにパーリ語（Pali）とアルダ・マーガディ・プラークリット語（Semi Magadhi Prakrit）がもたらされた。アヌラーダプラ時代（紀元前3世紀～紀元後10世紀）の初期にはすでにマハーヴィハーラ（Mahavihara）とアバヤギリヤ（Abayagiriya）という、それぞれ上座部仏教と大乗仏教（マハーヤーナ仏教）の研究および教育をおこなう寺院があり、前者はパーリ語、後者はサンスクリット語を使っていた。

シンハラ・プラークリット語（紀元前3世紀～紀元後4世紀）の特徴としては、長母音及び格変化を表す接尾辞の欠如を除けば、語彙と文法の面でパーリ語とアルダ・マーガディ・プラークリット語と似ていることにある。しかし、この時代には、碑文の数は多いが、一つ一つの碑文が非常に短く、書き方が一定に形式に沿っており、寺院への寄進を示すという同様の内容を持つという史料的制限があった。言い換えれば、上記の類似性を除けばシンハラ・プラークリット語――特に紀元前に使われていたもの――については、史料の性質から分からないことが多い。

プロト・シンハラ語（４世紀～8世紀）はシンハラ・プラークリット語がパーリ語の影響の下に徐々に変化してきて出来たものである。社会的な背景としては、上座部仏教の強い影響がある。言語学的には、有声音の無声化や母音調和、接尾辞及び接中辞の発展、動名詞の発達が見られる。また口語用法の影響を受けて語彙及び表現方法の簡素化が起きた。8世紀になると、プロト・シンハラ語は言語学的要素においては現代のシンハラ語とほぼ同様のものとなった。文字についても6世紀以降にアショーカ・プラークリット語のブラーフミー文字がシンハラ文字に変わり始め、8世紀には現在のシンハラ語とほぼ同様の文字ができた。そこには、サンスクリット語、プラークリット語、パーリ語のいずれにも存在しない「アェ」（**a#**）母音を表す文字も含まれていた。このような詳細な分析を可能にしている要因には史料の充実が挙げられる。シンハラ・プラークリット語期と異なり、この時期の碑文はより長くなり、内容及び形式が複雑になったことがある。

中世シンハラ語（8世紀～13世紀）の発展は、本媒体のシンハラ語の発展と密接に関わっている。9世紀からは、碑文の他に、本という媒体が現在まで残っている。現存しているシンハラ語最古の本として、9世紀に書かれ、サンスクリット語の本「カーヴィヤーダルシャ」（Kavyadarsha）からの翻訳本である「シヤバスラカラ」（Siyabaslakara）があるが、これは韻文体で書かれているため、論文ではその存在のみを示しておいた。ただ、ここで重

要なことは、「カーヴィヤーダルシャ」に書かれている詩の美学といった非常に学術的な内容を訳せるほどにシンハラ語が発展してきたことである。10世紀に書かれた散文の本については、2つの本が現在まで残されている。これらは仏教についての解説書である。12世紀からは逸話本であるバナカター（Banakata）が数多く残されている。

中世シンハラ語では語形変化がより明確に示されるようになり、文の結合が行われ、主語述語の関係が初めて出来上がった。その背景には、シンハラ語がプラークリット語の影響からほぼ抜け出たこと、また、プロト・シンハラ語期に見られた上座部仏教の影響が深化し、パーリ語の語彙が大量にシンハラ語に入ってきたことがある。このような変化により、シンハラ語で思考を明白に書き表すことが可能となった。つまり、近現代の散文体の基礎がこの時期にできた。

11世紀には政治的及び社会的な変革がおきた。インドからのチョーラ朝の侵略があり、ヒンドゥー教とタミル語が入ってきた。タミル語のシンハラ語に対する影響は、主に語彙にみられる。特に親族呼称、地位および税の名称に対するものが顕著である。タミル語の影響は、その後長期間にわたって継続し続けてきた。特に話しことばにおいてはタミル語からの語彙が多くあったが、これらは比較的短期間のうちにほぼ完全にシンハラ語化したとされる。これは、パーリ語およびサンスクリット語が主に書きことばに大きな影響を残していることと比べ対照的である。

ヒンドゥー教の影響は言語にもみられる。ヒンドゥー教の聖典言語であるサンスクリット語が多く使われるようになり、この言語を同様に聖典言語とする大乗仏教の影響も大きくなった。これらの影響のもとで、中世シンハラ語の散文体にサンスクリット語が多大な影響を及ぼし、サンスクリット語の語彙そのものをシンハラ語文の中で使うようになった。このような文体は12世紀の碑文及び本の散文に明白に示されている。また、サンスクリット語の散文詩の形式の移植がおき、シンハラ語でも散文詩がみられるようになった。この散文詩では内容よりも形式が重んじられた。上述のバナカターはこの散文詩の形式で書かれており、この形式重視の傾向はその当時の文学受容のあり方である聴衆を前にしての朗読に適していた。また、サンスクリット語の影響は文法や文字にまで達し、それまでシンハラ語及びパーリ語には見られなかったいくつかの文字がシンハラ文字に付け加えられた。

12世紀のシンハラ語の特徴：混合シンハラ語文体と純粋シンハラ語文体（第3章）

A)混合シンハラ語文体

このように入ってきたサンスクリット語は、同時にシンハラ語の新たな文体を作り出していった。混合シンハラ語文体である。それ以前のシンハラ語は様々な装飾的な表現は存在していたが、より複雑な思考を表すことには適していなかった。混合シンハラ語は短期間に広く受け入れられるようになった。この文体の初期においては、サンスクリット語の語彙がそのままシンハラ語で使われるという現象がおきた。つまり、シンハラ文字でサン

スクリット語が書かれていたのである。また、サンスクリット語の発音の法則、複合語、修辞用法そのものがシンハラ語で使われるようになった。このサンスクリット語の影響は、しかし個々の作品においてその強弱が見られる。『ブッサラナ』（Butsarana）ではサンスクリット語とシンハラ語そのものの語彙がバランス良く使われているが、『ダハンサラナ』（Dahamsarana）ではサンスクリット語が多用されている。

このように12世紀にサンスクリット語の強い影響が可能になった理由には、アヌラーダプラ時代から大乗仏教の研究・教育機関であったアバヤギリヤの影響があり、サンスクリット語が4世紀から6世紀においてはスリランカの碑文でも使われてきたことがある。さらには、多数派であった上座部仏教徒が、大乗仏教の影響を恐れ、その影響を良く理解するために、パーリ語に加えサンスクリット語も学んだことがある。また、4世紀から6世紀に強い勢力を持ったインドのグプタ朝がサンスクリット語を王朝の正式な言語として認めたため、この時期にサンスクリット語は高い発展を遂げた。その結果、スリランカを含むインド世界においてサンスクリット語は学識の言語となった。サンスクリット語のシンハラ語に対する強い影響を示す史料としては、プラークラマバーフI世（Parakramabahu I）（1153～1186）の残したガル・ヴィハーラ碑文（Gal Vihara）がある。この碑文ではサンスクリット語の単語が全単語の2／3を占めている。後継者であるニッサンカマッラ（Nisshankamalla）(1187～1196)の碑文においても同様の傾向が見られる。また、この時期には外来言語であるサンスクリット語を広く受容するために散文、韻文、翻訳文、用語集、文法書、辞書、逸話、翻案作品などさまざま種類の作品が生まれた。また、王がこれらのサンスクリット語の受容を積極的に支援した。

このような影響下で出来上がった混合シンハラ語文体は初期の中世シンハラ語の文体と比べ、次のような特徴を持っている。アヌラーダプラ時代末期の碑文に見られる初期の中世シンハラ語では、子音で語尾が終っており、名詞は格を伴わないが、混合シンハラ語文体では母音で語尾が終っており、最後に格変化を表す接尾辞が付いている。また、混合シンハラ語文体にはサンスクリット語の「賛辞」ヴルッタガンディー（Vruttagandhi）が適用されている。この高度に発達した賛辞は9世紀ごろの修辞家ヴァーマナによって確立された。そこでの基本概念とは「選集こそが優れた修辞用法である」というものだった。つまり、この考え方では定型句が重要視された。

このような混合シンハラ語文体が多く使われたことには上記に示した文体自体の表現力以外にも理由があった。王が碑文において積極的に使った背景には上記の賛辞の修辞用法が、王の権力を過剰に表し、また人々がそのような修辞用法を好んだことがある。すなわち、混合シンハラ語文体は王権を表すのに適切な文体だったのである。また、このような背景のもと、上述したように散文詩も多く受容された。

B)純粋シンハラ語文体

純粋シンハラ語はエル（Elu）またはヘラ（Hela）と呼ばれる。エルまたはヘラはシンハ

ラ語におけるシンハラ語に対する呼称である。文学作品の中では詩がほぼ完全に純粋シンハラ語文体のみで書かれてきており、純粋シンハラ語文体は混合シンハラ語文体の背景にある思想とは異なった思想から出てきている。純粋シンハラ語文体はパーリ語そのものおよびパーリ語の文体との類似性が強く見られる。12世紀の詩人グルルゴーミ（Gurulugomi）が書いた仏陀の生涯を描いている『アマーワトゥラ』（Amawatura）が純粋シンハラ語文学の最高峰に位置しているといわれる。この純粋シンハラ語文体では混合シンハラ語文体から独立した形で、多くの修飾語や複合文を可能にする文法要素が発達してきており、『アマーワトゥラ』ではそれらの文法要素が非常に高度に使われている。

このような純粋シンハラ語文体の確立には、グルルゴーミの様々な文体を扱う能力の高さによるところが大きい。彼のもう一つの著名な作品『ダルマプラディーピカーワ』（Dharmapradeepika）で、彼は仏教用語の語源的注釈を行っているが、ここではサンスクリット語とパーリ語を多様した非常に洗練された混合シンハラ語文体と、箇所によっては純粋シンハラ語文体を使っている。この作品には純粋シンハラ語文体の散文詩も含まれている。言い換えれば、彼が混合シンハラ語文体に精通していたがために、混合が起きる前のシンハラ語を見極めることができ、彼の作品において純粋シンハラ語文体の確立が可能になった。

しかし、このような起源を持つ非常に洗練された純粋シンハラ語文体は、一般の人には非常に難しかったと思われる。また、当時の文学受容のあり方が聴衆を前にした朗読であったことはすでに述べたが、グルルゴーミの二作品は黙読されることが意図されていた。これらのことが、その後この文体が継続して使われなかった理由として考えられる。

シンハラ語散文体の簡素化と修辞用法の多様化（第4章）

A)ダンバデニ及びクルネーガラ時代の散文体及び散文文学

13世紀の始めのころ、すなわちポロンナルワ時代の末期から、混合シンハラ語文体の簡素化（Simplification）が起きた。言語的な背景としては混合シンハラ語におけるサンスクリット語の乱用が挙げられる。上述のようにサンスクリット語はシンハラ語の表現力を高めたが、あまりに乱用されたため、高い教育を受けていない人には、文の意味が不明確になってしまうという現象が起きた。簡素化は同時にその当時に起きた政治的背景の影響も受けた。1215年に南インドから来たタミル系のカーリンガ・マーガ（Kalinga Magha）による侵略がおき、21年にわたって恐怖政治が続いた。その間に寺院をはじめとする教育・研究機関が大量に破壊され、シンハラ文学は衰退した。この恐怖政治の終わりとともにポロンナルワ時代もその終焉を迎え、ダンバデニ時代が幕開けする。

この新しい時代の初期に、それまで続いてきた中世シンハラ語が終わり、近現代シンハラ語が始まる。この分水嶺となるのが、13世紀の半ばに書かれた『シダットゥ・サンガラーワ』（Sidath Sangarava）である。この書物は詩文の解説書であるとともに、シンハラ語

の文法書として知られている。現存している近代以前の本の中で、『シダットゥ・サンガラーワ』が、前近代のシンハラ語についての唯一残っている文法書である。この書物を基に、20世紀のシンハラ語研究者のガイガーが中世シンハラ語と近現代シンハラ語の区分を定立した。

13世紀から15世紀にかけてのシンハラ語散文体の発展は、混合シンハラ語文体の簡素化がその主な流れである。この時代の簡素化された混合シンハラ語文体（簡素化混合シンハラ語文体）の標準的な特徴には以下のものが見られる。サンスクリット語の語彙そのものが、シンハラ語の文字で表記され、シンハラ語の文法に従うようになった。このような過程を経てサンスクリット語が受容されたため、そもそもサンスクリット語の語彙であったものがシンハラ語の語彙として成立するようになり、シンハラ語の語彙が増大した。また、パーリ語文学からの翻案作品が多くあったため、パーリ語の修辞用法が混合シンハラ語文体のそれに強い影響を及ぼした。この影響もあり、文学作品そのものが長大になった。さらには、サンスクリット語を多く含む初期の混合シンハラ語文体に見られたような「わざとらしさ」（Artificialness）が失われ、簡素化混合シンハラ語文体はより自然な文章となった。また、そもそもタミル語の語彙であったものもシンハラ語化し、この文体で自然に使用されるようになった。

20世紀中葉の著名な小説家であるマーティン・ウィクラマシンハ（Martin Wickramasingha）を含む、現在の多くの知識人はこの時期のシンハラ語には散文体と話しことばの間にほとんど差異がなかったとしている。つまり、散文体が民衆言語であったと主張している。しかし、以下の理由からこの説は不十分である。

上述の研究者はダンバデニ及びクルネーガラ時代を「散文体の黄金時代」と呼んでいる。この時期に韻文体がほぼ完全に不在であることや、優れた散文文学が成立したことがあり、この呼称は間違えではない。しかし、この時代に見られることは、単純な散文体と話しことばの一致というよりは、修辞用法の多様性と個々の作家の能力による修辞用法の確立である。

ダルマセーナ（Dharmasena）は、『サッダルマ・ラトゥナーワリヤ』（Saddharma Ratanavaliya）という本で、そもそも混合シンハラ語文体の散文詩で書かれていたバナカターを、民衆が分かるように簡素化混合シンハラ語文体で書き表した。その一方、ブッダプッタラ（Buddhapatra）は、『プージャーワリヤ』（Pujavaliya）という本で、12世紀の『ブッサラナ』の修辞用法に従っており、サンスクリット語が適宜使われている。また、『ダラダーシリタ』（Dalada Siritha）という作品では、時代を下ったクルネーガラ時代に書かれているにも関わらず、散文詩の文体で書かれている。興味深い点は、『サッダルマ・ラトゥナーワリヤ』においては、サンスクリット語の影響が薄れており、その反面、パーリ語の影響が強く見えるということである。このような作家による相違を非常に明確に表しているのが、『ジャータカ物語550選』（Pansiyapanas Jataka Pota）である。この本は何人かの作家の共著であるが、プラークラマバーフ IV世（Parakramabahu IV）（1302 ～1326）

の庇護の下に書かれた。全体的には『サッダルマ・ラトゥナーワリヤ』よりも簡素化した文体で書かれているが、個々の物語が独自の文体を持っている。口語用法で書かれていると思われる物語もあれば、プージャーワリヤのようなサンスクリット語を多く使っている文体で書かれているものもある。『ウンマッガ・ジャータカヤ』（Ummagga Jataka）は、『ジャータカ物語550選』の一つの物語が、その長さゆえに、別の本として同時代に書かれたものである。この作品では簡素化した文体が非常に効果的に使われている。この時期は、このように作家・作品によって文体が多様である。

このころの幾つかの作品では民衆の世界が文学作品にうまく反映されており、民衆の言語に見られたと思われる直喩（Similes）や格言（Proverbs）が多く使われていた。また、そもそもバナカターなどに見られたインドの社会的文脈が、スリランカのそれに置き換えられている。これらのことから、この時代の文学の一部は、おそらく民衆にもよく理解できたと思われる。この面からみれば、口語用法が簡素化混合シンハラ語文体に影響を及ぼしたことは確かである。つまり、進歩的傾向がこの時代にも見られるのである。しかし、簡素化が完全に進んだとは言えず、同時期の作品には、初期の混合シンハラ語文体が残っているものがあった。さらには、この頃の文学作品は全てにおいて文法的に書かれている。話しことばがいつの時代においても文法に必ずしも従わないことを考えれば、この頃の散文体が話しことばをそのまま反映しているとはいえない。

B）ガンポラ及びコーッテ時代における文学の凋落と復興

ガンポラ時代における研究手法の問題点として、ダンバデニ及びクルネーガラ時代に比べると、この時代に書かれた文章が非常に少ないことがある。

その少ない理由の一つの要因として、文学のあり方の変化がある。14世紀中葉のガンポラ時代初期には、それまでのシンハラ語散文文学のあり方が変わらなければならない必然的な理由があった。それまでは主な文学の営為としてパーリ語古典文学からの翻案があったが、この時期には古典の原典がすでに翻案されてつくされてしまっていた。このような状況下で、翻案ではない文学がごく少数作成された。『サッダルマーランカーラヤ』（Saddharmalankaraya）と『エル・アッタナガル・ワンシャヤ』（Elu Attanagalu Wansaya）はそもそもダンバデニ時代にスリランカで書かれたパーリ語作品を、厳密にシンハラ語に翻訳したものだった。

またこの時代には政治権力の弱体化があった。クルネーガラ時代にほころび始めた統一王朝がガンポラ時代には幾つかの王朝に分裂してしまった。それに伴い、それまで全島的に展開していた、サンスクリット語及びパーリ語を教えていた仏教の教育・研究機関が弱体化してしまった。このような影響で簡素化混合シンハラ語文体による文学が衰退した。この時期に作られた少数の碑文では、初期混合シンハラ語文体のような、サンスクリット語の装飾的使用が見られる。また、この時期の優れた文学とされるダルマキーリティ（Dharmakeerthi）の『ニカーヤ・サングラハヤ』（Nikaya Sangrahaya） は仏教諸教団

についての小史であるが、この作品ではサンスクリット語、パーリ語、及び口語用法が混ざって使われている。

コーッテ時代には強力な統一王朝が再度成立した。高等教育を行う機関が整備され、僧侶が非常の多くの仏教徒に対して教育を行い、文学の復興がおきた。散文文学としては『サッダルマ・ラトナーカーラヤ』（Sadharma Ratnakaraya）のようなバナカターを厳密に翻訳した作品が作られた。また、『パンチカー・プラディーパヤ』（Pancika Pradipaya）のようなサンスクリット語を多用する仏教解釈の書物が作られた。しかし、この時期の文学復興をより強く特徴付けるのは詩文においてである。現在の研究者にはこの時代を「詩の時代」と呼ぶ人もいるほどである。本論文において、ここで重要なことは、それまで純粋シンハラ語でしか書かれなかった詩が、その一部ではあるが、シンハラ語文学史上初めて簡素化混合シンハラ語文体で書かれたことである。すなわち、簡素化混合シンハラ語文体がシンハラ社会に深く根ざしていたことが伺われるのである。

現代言語としてシンハラ語に対する影響（第5章）

A)西洋植民地主義の影響

コーッテ時代の文学復興はヨーロッパ人の侵略によって終焉を迎える。スリランカは16世紀から1948年の独立に至るまで、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地主義下に置かれた。これら三つの西洋植民地主義は政治社会的なものから宗教、さらには言語や文学に至るまでの深遠な影響を及ぼした。ポルトガル及びオランダの植民地主義はキリスト教の伝道に重きを置いていた。それまでの仏教を中心とした研究・教育制度が、植民地主義の影響で没落し、人々の識字能力が著しく減退した。文法的に正しくない文章が書かれるようになり、パーリ語及びサンスクリット語の教育もほとんど無くなり、簡素化混合シンハラ語文体も使われなくなった。その反面、統治や文化や宗教に関する大量の新しい概念がポルトガル語及びオランダ語からシンハラ語に借用され、その結果、西洋語を起源とする大量のシンハラ語語彙が誕生した。このような影響から、シンハラ語でかかれる場合は、政府の公文書でさえも、非常に日常会話に近い口語用法を強く反映し、西洋語源の単語を多用した文体が使われるようになった。

イギリス植民地主義はこのような影響をさらに深化させた。キリスト教伝道者によって学校教育制度が確立し、キリスト教徒になるシンハラ人が増えた。また、この学校教育ではシンハラ語の教育も行われたが、その授業自体は英語で教えられた。このような傾向の一つの結実点は、1815年の英語の公用語化に見られる。このような社会における言語編成の変化ゆえに、事務職に就くため、商売を行うため、高等教育を受けるためなどには、英語を学ぶことが必要条件となった。逆に、シンハラ語に堪能は人には学校教育でのシンハラ語教師になるしか道が残されていなかった。

ポルトガル語及びオランダ語は、まず話しことばに影響を及ぼし、その後口語用法を介

して書きことばに影響を及ぼした。このことに対し、英語の影響は話しことばのみに限られていた。

B)言語復興運動

18世紀におきたウェリヴィタ・サラナンカラ（Welivita Saranankara)に代表される復興運動は、宗教、言語、教育にまたがる広範囲の運動であった。この背景にはポルトガル及びオランダ植民地主義によりそれまでの仏教の教育および制度が没落し、仏教的価値観が堕落してしまったことがある。このような状況に対して、サラナンカラは言語の復興こそが、仏教再興に必要な学術及び芸術活動を活性化すると考えた。上記に示したような日常言語をあからさまに反映しているこの時期の文体に抗して、サラナンカラは12世紀の混合シンハラ語文体こそが理想の姿であると考えた。具体的にはこの復興運動は「保護」の側面と「純化」の側面を有していた。「保護」の側面とは植民地主義によりその多くが破壊されてしまった過去の作品を転写によって保存することであり、「純化」の側面とは12世紀の混合シンハラ語文体を使って文学作品を作り出すことだった。もっとも「純化」と言っても後述するヘラ・ハウラ（Hela Havla）のように外来の要素を完全に排除しようとする運動ではなく、その目的はあくまでも12世紀の文体に戻ることだった。教育の面では、寺院を仏教教育の場として復興し、特にスリランカ南部及び中部高地において一般教徒を広く啓蒙した。

この復興運動の評価は、一面では話しことばと大きく異なる書きことばを復興させたことにより近現代シンハラ社会におけるダイグロシアに貢献したと言われるが、その反面その後のシンハラ語文学の復活に多大な影響を及ぼした。また、そもそも韻文の文法書であった『シダットゥ・サンガラーワ』（Sidath Sangarava）を散文文法に利用するという極端な方法を用いたが、シンハラ語文法を定立することには成功した。このような極端な行為はその後長期間にわたり影響を及ぼしたが、抑圧的な植民地主義に抵抗する精神的な契機にもなった。植民地時代はシンハラ社会にとって暗黒の時代といえようが、この運動はバナカターや詩や仏教解説書を創作する新たなる伝統を作り出した。

このほかに20世紀初頭により極端な形でシンハラ語を純化しようとしたヘラ・ハウラの運動がある。この運動はサンスクリット語にもパーリ語にも通じており、文法書や詩を作成したムニダーサ・クマーラトゥンガ（Munidasa Kumaratunga）（1887～1944）によって指導された。彼はシンハラ語から外来の要素を徹底して排除しようとした。このような努力は韻文のみならず、散文にも向けられた。さらには、書きことばに限らず、話しことばにおいても外来要素を排除した純粋シンハラ語を使うことを求めたために、日常会話を文法的に話すべきという過激思想に至った。この言語純化主義は独立を求めるナショナリズム運動の機軸となり、広い支持を集めた。

ヘラ・ハウラがモデルとしていたのは12世紀にグルルゴーミによって純粋シンハラ語で書かれた『アマーワトゥラ』だった。しかし、元々の『アマーワトゥラ』とは異なり、ヘ

ラ・ハウラの修辞用法は必要以上に装飾的になっていると批判された。このような批判はあるにせよ、ヘラ・ハウラはシンハラ語文体の整備に大きく貢献した。また、シンハラ語の公用語化運動においてもその底流をなした。

C)シンハラ語の公用語化

スリランカは1948年に政治的独立を果たしたが、スリランカ社会の言語編成では植民地時代と同様に英語が重要な言語としての位置を占め続けた。その後の現実政治的な展開から1956年にシンハラ語が唯一の公用語となった。この時期を前後して、シンハラ語は大学を含む学校教育で教授する言語して広く使われるようになり、時代に対応した語彙を発展させた。

近現代文学におけるシンハラ語（第6章）

A)20世紀以前の植民地時代おける進歩的傾向

上述のように、西洋植民地主義によってもたらされた口語用法への反発が言語復興運動の直接の原動力としてあった。文学において、この口語用法は具体的には聖書翻訳において最も顕著に見られる。聖書翻訳自体はその初期からキリスト教布教が目的であったことから、主にシンハラ語の書きことばの知識が不十分であった西洋人によって行われた。それら翻訳では、文法的な誤りが起きており、不適切な語彙や西洋語の音訳が多用されている。1819年に発行されたトルフィ（Tolfy）による翻訳の場合は、初期混合シンハラ語文体に基づいて翻訳しようとしたが、翻訳者がこの時期のシンハラ語についての知識が未熟だったことにより、特にサンスクリット語彙そのものの使用がこの文体とは大きくかけ離れたものになってしまった。また、意味をなさない言葉づかいが多く、少なからぬ文法的な誤りもあったため、非常に理解することが困難な翻訳となってしまった。1832年のコーッテ（Kotte）翻訳では、トルフィ翻訳の反省を受けて、日常会話に基づく口語用法で書かれた。しかし、翻訳者が日常会話とシンハラ語の文章語の違いをよく理解しなかったため、語彙の適切・不適切な用法にほとんど注意が払われずに訳されてしまった。これらに見られるように、この当時の聖書翻訳はシンハラ語母語話者には非常に滑稽に感じられる文章になってしまっている。「聖書ことば」という表現が、文法的、語彙的に誤ったシンハラ語に対する蔑称として最近まで使われていたほどである。しかし、このような試みは、その後のシンハラ文学における口語用法を促進した。

口語用法を進める進歩的傾向は論争（Debate）よっても促された。オランダ植民地時代に持ち込まれた印刷技術は19世紀には多くの新聞や雑誌の発行をもたらした。19世紀にはそれら新聞や雑誌の紙上において、論争という新たな文学表現が発達した。論争は大きくは2種類に分けられる。一つは紙上のみで行われた文学についての論争であり、もう一つは公共の場所で実際に行われた、仏教徒とキリスト教徒の間の論争の口述筆記であった。特

に後者においては、実際に話されたことばをそのまま文章にしたので、当然、口語用法が多用された。これらの文章は、混合シンハラ語文体やその後の復興運動で復活したこれをまねた文体などに比べて、一般人にとって分かりやすいものであったため、文学者はそこに新しい表現方法を発見した。特に、このころに出てきた小説における会話体に適していると考えられ、そこではこの表現方法が多く使われた。

これらの新聞や雑誌に載せられた論争やその他の記事は、社会におけるは様々な視点を一つの媒体に集めることを可能とし、また読者に読みやすい文体を提示したために、シンハラ語小説の先駆けであると言われている。このような素地があった時期に、英語に訳されていた様々な世界文学作品がシンハラ語に訳された。英語からの翻訳が可能になった背景にはイギリス植民地下の学校教育制度で英語を学んだ植民地知識人の存在があった。これらの人々は、『千夜一夜物語』、『天路歴程』、『ガリバー旅行記』、『ラーマーヤナ』などをシンハラ語に訳した。翻訳文学の文体は多様だった。例えば、英語からシンハラ語に訳された『ラーマーヤナ』（1886）では、物語形式の部分は伝統的な混合シンハラ語文体で、会話形式の部分は口語用法で書かれている。また、アイサック・ディ・シルワ(Issac de Silva)の『幸せな家族と惨めな家族』（Wasanavanta Pavula saha Kalakanni Pavula）(1888)はバニヤンの『天路歴程』と『ミスター・バッドマンの生涯』（The Life and Death of Mr. Badman, and Holy War）を掛け合わせ、翻案した小説である。この作品では対話形式の部分も物語形式の部分もほとんどが口語用法で書かれている。この時期の口語用法は非常に日常会話に近いものであり、間投詞やスラングが散見できた。

B)20世紀以降の進歩的傾向

20世紀初頭には、翻訳小説ではない、西洋文学における小説の概念に対応するような、シンハラ語による作品が創作された。サイマン・ディ・シルワ（Simon de Silva）の『ミーナー』（Meena）(1905)はその代表格であるが、この小説は基本的には伝統的な混合シンハラ語文体で書かれている。この例に見るように19世紀末には広く使われるようになった口語用法はそのまま継続して発展したわけではなかった。

ピヤダーサ・シリセーナ（Piyadasa Sirisena）はシンハラ文学で最初の大衆小説作家とも言える人物であり、なおかつ独立運動の闘士でもあった。彼の作品『ジャヤティッサとロサリン』（Jayatissa saha Roslin）(1906)は10年間のうちに第5版まで出版され、2万5千部も売れた。この教条的な作品では基本的には、伝統的な混合シンハラ語文体で書かれているが、会話部分では口語用法も使っている。しかし、彼の口語用法は文法的に正しく、論争の文体から多くを学んでいたことが伺える。

W・A・シルワ（W. A. Silva）は幾つかの作品において、初期の混合シンハラ語文体のようにサンスクリット語彙そのものを小説に利用した。しかし、その著名な歴史小説においても、シリセーナのそれとは異なった、教条的ではない文学を目指した。しかし、彼は小説としての形式を発展させることよりも、奇想天外で面白い話を追求した。

このような口語用法と伝統的な混合シンハラ語文体の併用は20世紀前半のシンハラ文学の特徴といえるが、これは文学上の問題に留まらなかった。つまり、この問題は進歩的傾向と純化主義の対立として認識され、広範な社会における意義を持っていたのである。上述したように、ヘラ・ハウラの極端な言語運動は独立運動と密接に繋がっていたため広い支持を受けていた。この運動に抗する動きとして1930年代のH・S・ペレーラ（H. S. Perera）の言語学があった。彼は『シンハラ読本』（Sinhala Kiyavim Pota）という本を始めたが、これは小学生にでも分かるような口語用法で書かれている。また、1940年にはアーリヤダーサ（Ariyadasa）という学者が教育的観点から口語用法の推進を求める新聞記事を書いた。ヘラ・ハウラはこれらの動きを敵視し、結局この口語用法に基づく書きことばを広める運動をつぶしてしまった。

進歩的傾向とそれに対する純化主義という対立は、文学上においてはマーティン・ウィクラマシンハの『変わりゆく村』（Gamperaliya）（1944)において一つの終結点に到達した。この作品はリアリズムを追求しており、近代小説として非常に高い評価を受けている。ウィクラマシンハは直接的な意味の発現のみならず、間接的な比喩の一部として語句を使用したが、難関な表現に頼るのではなく、バランスの取れた分かりやすい文体を作り出した。その後の作品では、この文体をさらに発展させ、文法的に正しいながらも自然な口語用法に基づく文体を作り上げた。このウィクラシンハの文体はその後の作家に多大な影響を及ぼした。言い換えれば、この時期に話しことばの影響を受けつつも完成度の高い文学表現、すなわち口語用法に基づきながらも洗練した文章語が確立したのである。

ウィクラシンハの文学も教条的な文学に対抗するものであった。しかし、W・A・シルワとは異なり、ウィクラマシンハは迷信を排除したリアリズムに徹し、小説としての形式を洗練することをその目的とした。つまり、芸術のための文学の確立を目指した。ウィクラシンハの進歩的傾向は言語純化主義運動の激しい抵抗を受けなかった。その理由としては独立のための教条的な文学とはそもそも距離を置いたこと、さらにはヘラ・ハウラの創始者であったムニダーサ・クマーラトゥンガが1944年に亡くなったこと、また独立を達成したことにより、言語純化運動が弱体化したことがある。

この進歩的傾向は現代シンハラ語文学によって担われ続けられている。ヤッカデュウェー・プラッグニャーラーマ（Yakkaduwe Pragnarama）は『森の物語』（Wana Kata）（1947)を形式的な口語用法で書いた。この作品は植民地からの解放目前という当時の雰囲気を反映しており、その中でサンスクリット語やパーリ語や西洋語を全て排除した形での口語用法に基づく文体を作り上げようとした。つまり、この作品はヘラ・ハウラと同様の反植民地主義という理想は共有しているが、ヘラ・ハウラのような復興主義的な純化運動という路線には従わなかった。プラッグニャーラーマは同時代的なシンハラ語のみで全てのことが書き表せるという思想を証明したかったのである。進歩的傾向の先鋭化とも言えるこの思想は非常に大きな議論をよんだ。その議論の中で、当時の知的エリートであったサナラトゥ・パラナウィターナ（Senarath Paranavitana）やM・W・S・ディ・シルワ（Sugatapala

de Silva）はこの試みに賛同する姿勢をみせた。

1970年代ぐらいまでの多くの文学は、ウィクラシンハの文体やこの先鋭化した思想に従い、優れた作品を残してきた。しかし、70年代初頭の政治運動の影響から、人々が話していることばをそのまま小説の文体とするという運動が出てきた。また、この時期には、国際的な英語の地位という影響や植民地的な遺産から、都市住民の日常会話には非常の多くの英語が入ってきていた。すなわち、日常会話を基にした口語用法は、英語の語彙を小説の文体に持ち込むということを意味していた。この傾向は1980代から現在まで続いている。

結論

本論文では、外来言語の影響と口語用法に注目して、スリランカ社会の社会的、政治的、文化的要因を考慮しつつ、シンハラ語散文体の発展過程を包括的に描いてきた。その結果、次の三つの結論が得られた。

第一には、シンハラ語散文体は直線的に進化してきたわけではなく、盛衰を繰り返すなかで発展してきた。12世紀には散文体として混合シンハラ語文体が出来上がった。その後13世紀から14世紀にかけて、混合シンハラ語の簡素化が起き、この簡素化を受けてシンハラ語散文文学が盛んに作られた。この時期がシンハラ語散文体の第一の到達点である。14世紀から15世紀になると散文文学が徐々に退行していき、15世紀になると詩の復興がおきた。それまでと異なり、この時期の詩には混合シンハラ語が入っていた。このことは散文体の広範な影響を示している。しかし、この流れは西洋植民地主義によって終焉を迎えてしまう。西洋植民地期には反植民地的傾向を持っていた18世紀の言語復興運動と20世紀の言語純化運動が散文体の発展に寄与した。また、この時期には進歩的傾向による反発も起きた。これら二つの互いに反発する流れの融合はマーティン・ウィクラシンハに代表される20世紀中葉の小説の文体の確立に見られる。これが第二の到達点である。しかし、1970年代には日常言語がまた小説に取り入れられるようになった。

第二には外来言語の受容の多様性があった。パーリ語、プラークリット語、シンハラ語はそもそも系統的に繋がっており、パーリ語とプラークリット語はシンハラ・プラークリット語と明確に分けることができない。サンスクリット語は12世紀ごろにはシンハラ語に多大な影響を及ぼし、混合シンハラ語文体を作り出すことに大きく寄与したが、13世紀、14世紀の混合シンハラ語文体の簡素化により、サンスクリット語の要素はシンハラ語化した。タミル語は語彙として11世紀ごろから継続的にシンハラ語に入ってきたが、容易にシンハラ語化していった。西洋語であるポルトガル語、オランダ語、英語は、シンハラ語の書きことばが弱体化した時期に影響を与えていることから、話しことばに主に影響を及ぼし、口語用法の流れに乗って散文体にも入ってきた。このことは、東洋言語であるサンスクリット語やパーリ語が書きことばや文体に直接影響を与えたこととは対照をなしている。しかし、英語に関しては、1970年代以降の文学で小説の文体の中に日常会話で使われる英語表現そのものが入ってきてしまっており、この西洋言語の特徴が今後変わる余地を残し

ている。

第三に、口語的散文体の到達点に至る経緯には進歩的傾向の二つの側面が多大な影響を及ぼした。第一の側面はおそらくあまり明白な意図がなく行われた、民衆の話しことばが文章語に与えた直接の影響である。これはおそらくいつの時代にも行われたが、主には13世紀、14世紀に行われた簡素化に象徴される。もう一つは意図的に行われた運動としての口語用法である。これは20世紀の散文文学運動に見られる。

以下では参考として本論の章立ての日本語訳を載せておく。

ページ数

第1章　序説　1 - 29

1. 1.　シンハラ文学の誕生
1. 2.　言語と文学
1. 2. 1.　東洋言語のシンハラ語に対する影響
1. 2. 1. 1.　サンスクリット語と言語変化
1. 2. 1. 2.　パーリ語及び他言語の影響
1. 3.　シンハラ文学の展開
1. 4.　近代における歴史的、社会的背景
1. 5.　シンハラ語への翻訳及び翻案
1. 6.　近代シンハラ語の進歩的傾向
1. 7.　公用語としてのシンハラ語

第2章　初期の発展と中世シンハラ語　30 - 64

2. 1.　シンハラ語の起源
2. 2.　シンハラ語の史的展開
2. 2. 1.　シンハラ・プラークリット語期
2. 2. 2.　プロト・シンハラ語期
2. 2. 3.　書きことばの発展
2. 3.　中世シンハラ語
2. 3. 1.　パーリ語の影響
2. 3. 2.　中世シンハラ語の初期の特徴
2. 4.　タミル語の影響
2. 5.　サンスクリット語の影響

第3章　混合シンハラ語文体と純粋シンハラ語文体　65 - 92

3. 1.　混合シンハラ語文体

3. 1. 1.　混合シンハラ語文体の発生過程
3. 1. 2.　サンスクリット語を多用した混合シンハラ語文体
3. 2.　ポロンナルワ時代のシンハラ語
3. 2. 1.　混合シンハラ語散文体
3. 3.　シンハラ語における文の成立
3. 4.　エル（ヘラ）シンハラ語文体（純粋シンハラ語文体）
3. 5.　古典期における言語の安定傾向

第4章　散文体とその簡素化　93 – 114
4. 1.　近代シンハラ語
4. 2.　ダンバデニ時代におけるシンハラ語の主要特徴
4. 3.　クルネーガラ時代のシンハラ語
4. 4.　ガンポラ時代のシンハラ語
4. 5.　コーッテ時代のシンハラ語

第5章　西洋言語の影響　115 - 143
5. 1.　言語復興運動
5. 2.　ヨーロッパ諸言語のシンハラ語に対する影響
5. 3.　英語の影響
5. 4.　近現代シンハラ語における純化運動
5. 5.　シンハラ語の文章語及び標準語

第6章　近現代シンハラ語文学　144 -177
6. 1.　論争、批評、口語用法
6. 2.　近現代シンハラ語フィクション
6. 3.　近現代シンハラ語小説の発生過程
6. 3. 1.　近現代シンハラ語の幾つかの小説及びそれらの文体
6. 4.　現代シンハラ語における進歩的傾向
6. 5.　20世紀後半の文章語
6. 6.　現代散文文学の主要特徴

結論　178 - 184

資料　185 - 190
I　スリランカの人々とエスニック・グループ
II　シンハラ語のアルファベットと語順

参考文献　　191 - 206

注：本要旨の日本語への翻訳に際し、以下の３文献を参照し、可能な限りそれらからの日本語語彙を利用した。これらの文献にない語彙に関しては、その発音をカタカナで表記した。

辛島昇、他監修.『南アジアを知る事典 ：インド+スリランカ+ネパール+パキスタン+バングラデシュ+ブータン+モルディヴ』. 東京: 平凡社, 2002.

高崎直道、他編.『仏教・インド思想辞典』. 東京: 春秋社, 1987.

野口忠司、クスマー・カルナーラトゥナ編.『「スリランカ/シンハラ文学を味わう」報告書』. （アジア理解講座 ；1997年度第2期） 東京: 国際交流基金アジアセンター, 1999.